# 百々裏話（86）

おもて　あきら

**◎賀々女の諷誦文**

掲出した写真は、もと興福寺大乗院に所蔵されていた文書の、紙背に書かれている諷誦文である。文書そのものが文和年間に書かれたものであり、この諷誦文も文和二年（一三五三）筆に疑問の余地はない。難読の部分もあるが、一応次のように読まれる。

敬白
　請諷誦事
　三宝衆僧御布施
右為親父三十三年之忌影明
？
年三月廿四日之間引上依右無想
？
大居之深場諷誦可修也乃至
法界平等利益　敬白
　文和二年三月十五日　賀々女敬白

冒頭の「敬って白す、請くる諷誦の事、三宝衆僧御布施」は自然居士の能でお馴染みの諷誦文の定形であり、末尾の「乃至法界平等利益」も慣用文句であるが、中間はかなり規格をはずれており、文意不分明の点もある。しかし、亡父の三十三年忌が明年なのを本年に繰り上げ、無双の霊場たる興福寺で追善のための諷誦を修する意ではあるらしい。

この写真、諷誦文の実物を例示するために掲出したわけではない。問題はこの諷誦を上げた「賀々女」である。

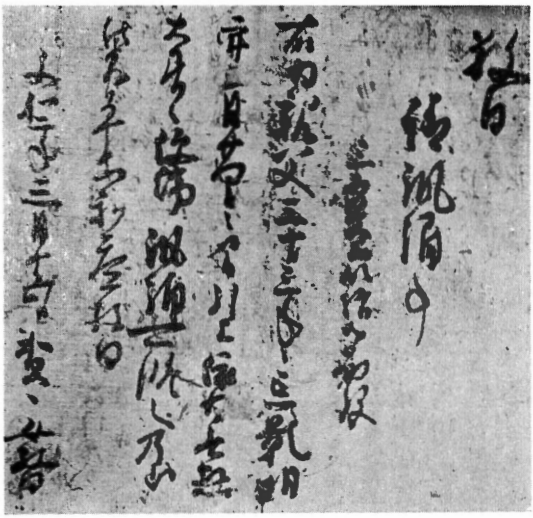
世阿弥の音曲伝書『五音』下に、亡父観阿弥が白髭の曲舞を舞い出したのが能に曲舞音曲が採用された最初であることを述べた後、曲舞（くせまい）の歴史について言及した左の記事がある。

道ノクセマイト申ハ、上道・下道・西岳・天竺・賀歌女也（乙鶴、此流ヲ亡父ハ習道アリシ也）賀歌ハ、南都ニ百万ト云女節曲舞ノ末ト云。今ハミナ〳〵クセマイノ舞手（人体）タエテ、女クセ舞ノ賀歌ガ末流ナラデハ不レ残。ギヲンノエノ車ノ上クセマイ、コノ家ナリ。（観世本による）

これによると、能百万のモデルに相違ない南都（奈良）の百万の末流が賀歌女、すなわち女曲舞の賀歌で、その賀歌の末流のみが世阿弥時代に残存していた「道の曲舞」（曲舞の専門家）であったらしい。

この賀歌女については、『世阿弥新考』所収の香西精氏の論考〝女曲舞「賀歌」〟に詳しい考察があり、室町期の諸記録に「加賀女」「加賀ぶし」「かゝと申す白拍子」「加々白拍子」「賀々が舞」「加賀ノ女舞」などと記録されていて、賀歌はガカではなくてカガと読むべきであろうことや、応年十五年（一四〇八）の後小松天皇北山第行幸の際に天覧の光栄に浴した事を初めとする、その活動の跡が考証されている。

ところで、引用した『五音』下の文に、賀歌女の右肩に「乙鶴、此流ヲ亡父ハ習道アリシ也」と注記があるが、これは『申楽談儀』八段に「観阿、節の上手也、乙鶴がかり也」



とあるのと同趣旨で、観阿弥が乙鶴流の曲舞を学んだことを示している。『五音』の文からは賀歌女と乙鶴の関係が不分明で、能勢博士は賀歌女の別名が乙鶴であろうと解されたが、香西氏は、賀歌ないし賀歌女は上道・下道・西ノ岳・天竺と並ぶ曲舞の流派名で、同流の始祖または中興者の芸名に由来する名かと考えておられる。これは香西説に従うべきで、『教言卿記』の北山第行幸を記録した記事に「寿玉」と「五々」の二人を「加々」(賀歌)の名で一括しているのを初め、室町時代に賀歌(加々・賀々)が遊芸の名称ないし流派名として通用していたことが確実である。右の注記も、賀歌女の一人であった乙鶴流の曲舞を観阿弥が学んだの意に解すべきであろう。もっとも、乙鶴の別称に由来する流派名が賀歌である可能性が全くないわけではないことは、香西氏の言われる通りである。

以上のような、賀歌女に関する世阿弥の発言や従来の研究を背景に置いて、掲出した文和二年の賀々女の諷誦文を見直して見る時、それが極めて興味深い史料であることが明らかであろう。諷誦文の「賀々女」が世阿弥のいう「賀歌女」であろうことは、『北山殿行幸記』などに「賀々」と記録された例がある事や、この諷誦文が興福寺に納められたものであり、賀歌女が始祖百万の出身地である点で南都と関係が深いこと、及びその名の特異性等から考えて、ほとんど確実であろう。とすると、この諷誦文は、まず女曲舞賀歌に関する最古の史料としての価値を持つことになる。これまでは応永十五年以前の記録が知られていないのであるから、一挙に五十年以上遡ることになるのである。

また、この「賀々女」と世阿弥が言及している百万・乙鶴の関係も興味深い。その場合、諷誦文の署名が個人の芸名なのか職業名なのかが問題になるが、前者の可能性がより強いように思われるものの、施主名をボカした諷誦文も多いので、断定は困難である。もしも個人名ならば、百万の芸系を継承し、後に流派名に名を残すほど女曲舞に長じていた人物が「賀々女」ということになろう。どちらであるにせよ、彼女は文和二年に父の三十三回忌を修しているのであるから、当時40歳位にはなっていたはずである。観阿弥は元弘三年(一三三三)生れらしいから、文和二年には数えの21歳であり、「賀々女」よりかなり年下である。彼が能に曲舞を採り入れたのは応安(一三六八～)初年と推測されており、乙鶴流の曲舞を習ったのはその直前であろう。その頃には「賀々女」は60歳近い高齢になるから、観阿弥が乙鶴から直接に指導を受けたとすると、右の「賀々女」が乙鶴である可能性は、比較的少ないように思われる。直接でないとすれば、その可能性が若干強まることになろう。

「賀々女」が百万である可能性は、百万の活躍時期が不明のため、探るべき手がかりがほとんどない。百万が奈良の人であった点を重視して、関係をつけようとすればつけられなくもないが、所詮憶測の域を出まい。結局、百万―賀々女―乙鶴の系譜が一番可能性が強いように思われるが、どんなものであろうか。貞和五年(一三四九)の『春日若宮臨時祭記』で三番猿楽を演じている「カヽ御前」と「賀々女」を結びつけようとするのは、同じ臨時祭に翁面を勤めた「ヲトツル御前」を曲舞の乙鶴に結びつけること以上に、無理であろう。

それにしても、掲出した諷誦文は、賀歌女に関する最古の史料としてだけでも、貴重なものと言えよう。容易に見られない文書なので、写真を添えて紹介することにした。なお右の文書の調査にあたって多田侑史氏に大変にお世話になった。厚く御礼申し上げる。

(46・10・30)